
一週間天使。

たまと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一週間天使。

【Nコード】

N4083A

【作者名】

たまと

【あらすじ】

悪魔対抗課アジア支部のタロエルは、いつもダラダラのお調子者。そんな彼に来た仕事は、意外なものだった。《一週間以内に仕事を終わらせないと即死刑》タロエルのお仕事が始まる。

★ぷろろーぐ 1

「タロエル。」

カニ先輩が、デスクで漫画読んでる俺に話しかけてきた。

「何すか、カニ先輩？」

「カニエル部長と呼べ。あほ。」

ここは、天界。主に天使が住む場所。その悪魔対抗課アジア支部。

「タロエル。お前に仕事がある。」

「えー、俺っすか。だりい。他の奴に頼んで下さいよ。」

「俺もそうしたいところだが、優秀な部下達は、みんな別の仕事に行ってるな。」

「じゃあ、カニ先輩行って下さいよ。」

「ばか野郎！俺は行けねえよ。それと“カニ先輩”は、やめろ！！」

「いいじゃないっすか。スクールの時からの知り合いだし。」

カニ先輩は、俺のスクール一期上の先輩だ。その若さで部長になったのは、とってもすごい事らしい：

「とりあえず、お前に仕事行ってもらうからな。これは、天使長直々の命令なんだからな。」

「え、マジ！？天使長直々って、すごい重大じゃん。」

天使長とは、天使の中で一番偉い人だ。

「で、その仕事なんだが…、少し条件がある。」

カニ先輩が、なんか難しい顔をする。

「何すか、その条件って？」

「とても言いにくい事だが…」

「だ・か・ら、何すか？」

「言っても、逃げたりしないよな？」

「天使長命令を逃げる馬鹿なんていませんよ。」

「…えーと、一週間以内に完了しなかったら……即死刑。」
ん？

即死刑？

……

「しけいい！！！！？」

逃げたくなった。

★ぷろろーぐ 2

俺は、夢でも見てるんだろうか。

「し、死刑だなんて有り得ませんよ！な、何言ってるんすか、か、カニ先輩！」

やばい、俺、テンパってる。

「そうなんだよ、俺も自分の耳を疑ったよ。これは極めて異例な事なんだ。」

カニ先輩も、少しテンパってる。

「しかも、こんな時に、よりによってお前しかいないなんて…」

え、俺、今かるく馬鹿にされた？

「いいか、タロエル。これはお前の命だけじゃなく、俺のクビもかかってるんだから失敗は許されないぞ。」

明らかに前者の方が重大だ。

「これ、まじ話すか？」

「大マジだ。」

ああ夢なら覚めて、ドッキリなら早くバラして…

「大丈夫だ。内容は、そんなに難しい仕事ではない。」

顔が、不安そうっすよ、カニ先輩。

「嘘吐かないで下さいよ。簡単な仕事にクビとか、命とかかけないでしょ、普通。」

「下級悪魔一匹だ。」

あー、それはそれは、非常に大変な仕事だ。俺が百人いたって無理…

ん？

下級悪魔一匹？

「思ったより余裕っすね。」

「だろ。なんで天使長が、ソレに俺のクビをかけたのが、よく分かんないだよ。」

俺の命もね。

「なんか、裏がありそうっすね。」

「ああ、多分あるね。つまり、簡単だけど重大な仕事って訳だ。」

簡単だけど重大な仕事か…。

重大な仕事↓成功↓出世

しかも、簡単。「カニエル部長。この仕事、私が立派にやり遂げてみせましょう。」

こんなおいしい話はない。

「お、やってくれるか、タロエル。なんか急にやる気出したな…」

「天使として、当然な事ですよ。」

「じゃあ、早速明日から人間界に降りてもらおうかな。手続きは、こっちでやっておく。」

「はい。」

俺は、この時まで知らない。これから起こる悲しい事を…

★二日目

ここは、アジアの日本。俺は今、その高等学校にいる。

「はい、みんなあ注目。今日は、このクラスに転校生が来ます。」

眼鏡の女教師が、大声で生徒達へ言った。教室が、ガヤガヤしてうるさい。

「えーと、外国から来た、天野太郎君です。」

太郎って…、カニ先輩、変な名前つけたなあ…。

「帰国子女だー！」

「ねえ、ちょっとかっこよくない。」

「男かよ！」

ほんと、うるさい。カニ先輩が言うには、この中に悪魔がいるらしいんだけど、本当にいるのか？

「じゃあ、天野君。あそこの席に座ってね。」

女眼鏡先生が、一番後ろの席を指差した。

俺は、その席に座った。

「天野君。あたし宮野桜って言うんだ。よろしく。」

右隣りの子が話しかけて来た。

って、髪がピンク！？日本人って髪の色って黒だったよな？

「よ、よろしく。宮野さん。」

「俺は、坂田ひろきって言うんだ。よろしくな。」

今度は、左隣りの奴が話しかけて来た。

っ！？色黒っ！！日本人って黄色人種だったよな？

「桜に言ってやれよ。髪の色センスないぞって。」

あー、やっぱり染めてるんだ。

「うっさいな、黒人！あんたの肌の色の方が異常よ！！」

どっちもどっちってカンジ：
二人が、ケンカ（？）してる間に俺は、教室の生徒達を見てみた。

うわー、ふつー。目立つのは、この二人だけか……。悪魔もうまく潜入してるなあ……。この中から探すの手間がかかりそー。

結局、一日が過ぎた。

一日経ってわかった事は、一つ。

俺、ここではモテるわ……

天界では、みんなレベルが高くて全くモテなかった俺だけど、人間界に降りてみたら、モッテモテ。

んで、今、同じクラスの一人暮らししている女子の部屋に誘われている。いや、別にいやらしい気など無いぞ、うん。これは、調査だ。うん、そうだ。

「天野君で、どこの国にいたの？」

「韓国。」

アジア支部なんで、アジア以外よくわからん。

「あははー、結構近いじゃん。ヨーロッパのどこかと思ったよ。」

「石川さんは、外国行った事とかある？」

一応、話題を振っておく。

「カナは、まだ行ったことないよ。」

下の名前、“カナ”って言うんだ。へえ。

「はい、カナの家到着。」

そこには、立派なマンションがあった。

……

「やっぱ、今日は、あがるのやめとく。」

「えー、なんでー。カナの事嫌いなのか？」

「そうじゃないよ。ただまだ俺、石川さんのことよく知らないしさ。また今度ってことで。」

「…うん、わかった。約束だよ。」

「うん。約束。」

そして、俺は、カニ先輩が借りたアパートに戻ることにした。

誰かに見張られてた。一体誰なんだ？

俺は、今、アパートでタバコを吸いながら考えごとをしていた。さっき、石川カナの部屋に入ろうとした時、明らかに誰かに見られてた。今回のターゲットか？それだったら、それで別に構わないけど、監視課の奴等だったらかなり面倒。なぜなら、天使は人間と淫らな行為を行ってはいけないのだ。（天使は、聖なる存在なので、悪い印象を与えるのは全て禁止。）違反は、厳しく罰せられる。

あーん、せっかくモテてんのに、これじゃあ台無しじゃん。早めに仕事終わらせてから、天界でマイハニーに癒してもーらお。

もう眠ろつと…

ZZZ…

★二日目

二日目。

だめだ。誰が悪魔なのか、見当もつかない。

「天野、どうしたん？」

やけに黒い男が話しかけてきた。

「ん、なんでもないよ。」

「なんか、深刻な顔してんぞ。ほんとに大丈夫か？」

こうなりや、聞き込みでもするか。

「なあ、黒田。」

「坂田ですけど…。」

「あ、ごめん。でさ、坂田あ、このクラスでなんかおかしい奴とかいない？」

「おかしい？」

「うん。例えば、“コイツ人間じゃねえ”みたいな奴とか“ホントに人間か、コイツ？”みたいな奴とか。」

「人間外探してるのか？」

「い、いや、別にそんな訳じゃないんだけど…」

意外に鋭いな、コイツ。

「…うーん。おかしい奴ねえ…。あ、木下は？」

坂田は、窓側に座ってるおとなしそうな女子を指差した。

「普通の子じゃん。」

「アイツ、男なんだぜ。」

っ！？うそー。あ、さっきは、上半身がワイシャツで下半身が死角になって分かんなかったけど、ちゃんと男子のズボン着けてる。

「ふー、びっくりした。あんなかわいらしいのに…」

「あと、やっぱりおかしいのは、桜だろ。」

「へ、なんで？」

「だって、あの髪の色だぜえ！あれは、おかしいよ！」

笑いながら坂田は、言った。コイツと宮野、ホントに仲良いな。
「ま、変な奴は、それぐらいだな。」

宮野と木下か：

今日、二人の内誰か、調べてみるか：

女男 ピンク女

うーん

ピコン！！

女男＜ピンク女

よし。今日は、宮野を調べるぞー。

キーンコーンカーンコーン

放課後。

「ごめんな、宮野。俺のわがままに付き合ってもらって。」

「いいのいいの、どうせ暇だったし：」

俺は、今、宮野と買い物に行く途中だ。

「それに天野君、ここ来たばかりで、ここら辺よく分かんないよ。
アタシが案内してあげるよ。」

「助かるよ：」

さあ、どうやって悪魔かどうか、調べるか：

とりあえず、

「宮野さん、この十字架のネックレスどう思う？」

首に、かけてるネックレスを見せる。

「うーん、普通ってカンジ。」

普通な答えだ。

「宮野さん、ちょっと待ってて。」

自販機でペットボトルの炭酸水を買った。

「はい、これ。買い物付き合ってくれるお礼。」

聖水入りのな：

グビ グビ

「んー、何か変な味するよー。」

それだけ？

うん。確実に彼女は、悪魔じゃない。悪魔は、聖水の匂い嗅いだだけで苦しがるからな：

うーん、じゃあ今日は、純粹に買い物でも楽しむか。

あーあ、監視課みたいのが居なかったら×××な事や×××な事までやれそうなのになあ：

すっかり辺りは、暗くなった。

「あー、楽しかった。」

宮野が言う。今日は、いつの間にか、俺の買い物じゃなく、宮野の買い物になった。しかも、俺、荷物持ち。

ま、いつか。買い物してる時にわかった事があるから、それはそれで得したと思えば…

「天野君って、家どこ？途中まで一緒に帰ろうよ。」

「あ、ごめん。ちよっとこれから、こちら辺で用事があるんだ。」

「ふーん、わかった。じゃあ、またいつか遊びに行こうね。」

宮野は、俺が持っていた買い物袋を取り道路の向こうまで駆けて行った。

「じゃあねー。」

途中で振り向いて、手を振る宮野。かわいい。

て、そんな事考えてる場合じゃない。

俺は、目の前にあった名も知らない十階建てぐらいのビルに入った。そして、エレベーターに乗り、屋上へ行くボタンを押した。

ガチャン

屋上へ着いた。

そこには、背の高い一人の男がいた。

「覗きなんて、趣味悪いぞクソ悪魔。」

そう。俺の目の前には、悪魔がいる。て言っても、姿形は人間と変わらないけど…（俺もだけど）悪魔は、黙り込んだままだ。

「昨日からずっと覗きやがって…、監視課だと思ったじゃねえか！
！」

「別にお前を覗いた訳じゃない。」

「言い訳くさい。まさにストーカー。このスーパー天使タロエル様が成敗してくれるわ。」

「やれるもんならやってみろよ。」

悪魔は、背中からいかにも悪魔らしい羽を出し、空を飛んだ。

「燃えろ…」

ボオオッ！！

悪魔は、炎を口から吹いた。それを俺は、横に飛んで躲す。

「キー、空飛ぶなんて卑怯だぞ。」

「お前も飛べば、いいじゃないか…」

「天界では、地上で翼をだすの禁じられてるの！」

「フフ、じゃあ俺の勝ちだな。」

「それは、どうかな…」

鞆から、布に包まれたモノを出す。

「ジャジャーン！日本では持ってたら銃刀法違反で捕まる“拳銃”」
「！」

包んでいた布を剥いたらそれは、近代の片手銃。

「はっはっはー！そんなちんけなモノで俺が倒せると思ってるのかあ！！？」

パァーンッ！！

悪魔の右手が吹き飛ぶ。

「ぐがあっ！！！！」

「“弾”が、“特注”なもんで。」

「キ、キサマァ！！」

悪魔がもぐく。そして、悪魔は怒りに身を任せて炎を吹いてきた。さっきの炎とは段違いの威力で範囲も広く、避けれそうにない。
「なんだよ、その威力…。絶対下級悪魔のレベル余裕で超えてるよ。」

カニ先輩の奴、嘔吐きやがったな。あの悪魔は、中級悪魔だぞ、

絶対。

俺は、落ち着いて銃を向かってくる炎に構えた。

パパーン

炎に大きな穴ができ、炎が屋上の地に着いた時、ちょうどその穴の中に俺が入った。そして、悪魔の額には縦線に切り傷ができた。「くそお、紙一重で避けられたか。」
額、狙ってたのに。

ッ！？悪魔が物凄いスピードでこっちに向かって来た。は、疾い！スピードだけだったら、確実に負けている。

懷に潜り込まれた。

「ハッハー！銃なんて、近付いてしまえば、こっちのもんよ。」

悪魔は、左手に炎を宿し大きく振りかぶった。

ゴンッ！！

振りかぶっている間に俺は、銃を持っていない左手で悪魔の顎を殴った。人間の形をしてるので、あまり人間と変わらない。顎を思いつきし殴れば脳が揺れ、数秒意識が飛ぶ。その間にこめかみに銃口を向ける。

「チェックメイトだ、この野郎。」

パパーン

銃声は、星空に空しく響いた。

夜風に灰色の粉が流れる。

★三日目

三日目の早朝

♪♪♪

携帯が、なった。

ピッ

「はい、もしもしタロエルです。」

『あー、カニエルだが、昨晚は、ご苦労さん。ていうか、お前、処
理班には連絡入れといて私に連絡無いのは、何故だ。』

あ、忘れてた。

「あー、すいません。カニ先輩。もう昨日は、戦闘で疲れてて。」
『馬鹿者！！普通、こんなのは、先に私に連絡入れるモノだろうが
！！』

「まあまあ、説教は、後にして下さいよ。今日中には帰ってきます
から。」

『それがな…。お前まだ帰れないぞ。』

へ？

「えー！何でっすかーっ？！」

『お前が、倒した悪魔、下級悪魔だったか？』

あ、

『それと、お前のクラスメイトだったか？』

あ、あー！！全然知らん奴だった。

『違うだろ。つまり、お前が倒した悪魔はターゲットの悪魔とは、
別の奴なんだ。』

「えー！！あんなに頑張ったのにー。」

『と言う訳で、再び任務続行よろしくな。』

プ ツー ツー ツー

マジかよ。

今日から、もう学校に行かなくていいと思い込んでた俺は、当然のように遅刻した。

「転校して、三日目でもう遅刻か？」

坂田が、話しかけてきた。もうこの黒さも見納めだと思ってたのに：

ていうか、また一から悪魔探ししないといけないじゃん。ちょーだりい：

「なあ、天野。ちょっと話があるんだけど…」

「ん、何？黒田。」

「坂田だ。お前、わざと名前間違えてるだろ。ま、いいや。ちょっと廊下に出よ。」

俺は、坂田に言われるがままに、廊下に出た。

「なあ、お前、昨日桜と一緒に街に居たよな？」

「うん、いた。」

「お前ら、付き合ってるのか？」

真剣な顔で聞いて来た。ははーん。こいつもしや：

「いや、付き合ってるないよ。俺、ここ来てまだ三日目だぜ。それは、無いだろ。」

「そ、そうだよな。」

しばらく沈黙が続く。

「坂田、宮野のコト好きなん？」

「ぶっ！！！！」

坂田が、吹き出した。

「な、何で、お、俺が、さ、さ、桜のコト、」

焦りすぎ…

「好きなんだろ？」

「うん。」

素直だな。

「じゃあ、告ればいいじゃん。お前ら仲いいからうまくいくと思うぜ。」

「いや、なんていうか、告れない、というか、まあ、いろいろと理由があるんだよ。」

ビビってるだけだろ。

「じゃあさ、明日、ダブルデートしようぜ。」

「ダブルデート！！！！？」

「そ、ダブルデート。学校が終わってから、宮野と坂田と俺と、あと一人はてきとーに連れて来るよ。」

「で、でも俺は…」

「大丈夫、大丈夫。そんな臆病じゃ恋は発展しないぞ。じゃ、決まりな。」

「お、おう。」

ふう、恋のキューピットも大変だぜ。これも天使の仕事（キューピット課の）。さ、明日のお相手を探さなくちゃ。

て、俺今、仕事中だったんだ…。

学校が、終わり、みんなが帰宅する時間帯。俺は、ストーカー…、違った、追跡調査をしている。

調べてるのは、木下。

宮野が、昨日、悪魔じゃないとわかってから、他に怪しい奴は、もう木下しか残ってない（坂田曰く）。

ていうか、アイツ、ほんとに女っぽい。今日、探りをいれる為に何回か会話したが、しゃべり方も女だし、仕草も女っぽい。ある意味、それだけで、悪魔より怖い。

！？

木下が、人気のない路地裏にはいつていった。

くそ、俺のストーリーキングに気付いたか。だが、甘い。俺は、天界では“追跡蛇”の異名を持つほどのストーリーキングの名手だ。その俺から、逃げようなんて、十年早い。

俺は、木下に入った路地裏に入っていた。

いない！？

木下が、路地裏に入ってからまだそれほど経っていないのに、木下の姿は、そこには、なかった。

怪しい…

★四日目

ここは、天界のほとんどの公務が、働く場所“天園”。私、カニエルは、その、悪魔対抗課アジア支部の部長を勤めてる。

今、私は“ある人”に会う為、“ある場所”に向かって、天園の廊下を歩いている。そこは、天園で、一番高い場所にあり、天園の中央にある部屋。

“天使長室”

天使長室のドアの前に立ち、ベルを押す。

ビー

『はい、どちら様でしょうか？』

おそらく天使長の秘書が、ベル越しに言った。

「悪魔対抗課アジア支部のカニエルという者です。天使長に面会しなくては参りました。」

『カニエル様ですね。お待ちしております。中へどうぞ。』

お待ちしております？

今日は、何も連絡も入れずに来たのだが：

天使長室のドアが、ゆっくり開いた。

「お待ちしております。カニエル様。」

そこには、さっきのベルの声らしき女性が、頭を下げて待っていた。

「お待ちしておりますと言いましたが、私は、今日、アポなしで、急に来たんだが…」

「あ、はい。普通だったら、事前に連絡を入れないと天使長との面

会は、出来ません。ですが、天使長自らが、カニエル様が来たら、通すようにと、おっしゃってたので…」

ほう、天使長は、私がここに来るのをお見通しして訳か…

「天使長は、今、他の御方と謁見中なのであちらのソファアールでお待ち下さい。」

私は、言われるがままにソファアールに座った。

にしても、天使長室は、広い。そして、奥にも二つドアがあって、多分一つは天使長の部屋で、一つは、秘書達の部屋だろう。全く悪魔対抗課アジア支部の部屋と比べるとそれはもう…

秘書も、見たところ二、三名いるし…

これが、私の目指してる場所…

ガガガ

奥の扉の一つが開いた。そこから、天園では見慣れない偉そうな顔した奴等が数名出てきた。そして、その最後に天使長“サファエル”が出てきた。

「やあ、カニエル。もうきてたんだね。」

偉そうな顔した客人は、もう外へと出ていった。

「さ、中へどうぞ。」

天使長が、中へと手招きをする。

この天使長は、若い。まあ、若いって言っても、三十代前半ぐらいだが、歴代の天使長に比べると異例な程若い。まあ、若いでの昇進は、私も記録を出してるが…。

私は天使長の部屋のソファアールに腰掛けた。

「今日は、あの任務について来たんだろう。」

天使長は、なんでもお見通しか…

「はい。あの任務は、おかしすぎます。まず、あんな下級悪魔一匹を退治する任務が、天使長直々の任務だなんて…。そして、その任務に一人の天使の命を懸けてるなんておかしすぎる！そして、タロエルが遭遇した中級悪魔…」

ふう、私としたことが、少し熱くなりすぎた。

「まあ、君が言うのも分かるがな。」

天使長が、口を開いた。

「ただ、それだけあの任務は重要なのだ…」

「私は、そう思いません。たかが悪魔一匹…」

「そう、たかが悪魔一匹…、だが、その悪魔が“第一級大罪”をしようとしてるのだ。」

「第一級大罪！！？」

第一級大罪とは、天界が決めた規則の中でも一番重い罪のことである。

「そう、あいつらのやろうとしてる事は、決して許してはならない事なのだ。」

「あいつら？悪魔は、一匹じゃないんですか！？」

「いや、始末する悪魔は、一匹だよ、一人は…」

「教えて下さい！！その悪魔は、一体何をするつもりなんですか！？」

「いいだろう。その悪魔のやろうとしてる大罪は…」

「…と言う事だ。」

天使長が、話終えた。

「そんな大罪…。もしタロエルが、失敗したら世界は混乱と混沌に覆われますよ！」

「そうだ…。」

「何呑気なこと言ってるんですか！早く応援をタロエルによこさない…。と言いますか天使長、畏れながら言わせてもらいますが、何故こんな重要な任務に我々悪魔対抗課に任せたんですか？天使長ご自慢の“特殊隊”でもお使われになった方が良かったのでは…」

「カニエル。君は、何もわかっていない。今、この任務に大きな動きを見せ、“ソレ”が、民に知れ渡ってみろ。それこそ、混沌を招く原因になる。だから、そなた達に任せた。そして、応援を送ることは、私が許さない。」

くっ、頑固な奴だ。

「今は、君の部下タロエルを信じるしかなかるう。きつとうまくいく。」

失敗したら、責任は全て悪魔対抗課アジア支部にか…。

なかなか、えげつないコトしやがるな、サファエル。

四日目

今は、学校が終わり、俺、宮野、坂田、あと石川カナと四人で制服のままで街を歩いている。

つーか俺、こんな事してる暇は、無いんだけど…

あと三日で、悪魔退治しないといけないのに、まだ誰が悪魔な

のか断定できてない。

まあ、木下が、一番怪しいとは、思っている。今日、ちょっと探りをいれようと思ってたけど、あいつ学校休みやがった。このタイミングといい、昨日の事といい、怪しすぎる。

「どうしたの？天野君、元気ないじゃん。」

石川カナが、話しかけてきた。

「別にそんな事ないよ。メチャクチャ元気っすよ。」

「そお、よかった。今日は、何か坂田君も元気ないし、これで、天野君も元気なかったら、なんかあったのかなあと思ったよ。」

そうなんだよ。坂田の為に仕事の時間削って、遊びに来たのに、問題の坂田が、あまり元気がない。

ここは、いっちょ俺が…

「坂田、どうしたん？」

「あ、え、何が？」

元気なさそうに坂田が答える。

「坂田、今日元気ないじゃん。」

「え、そうか？」

コイツもしかして…

「緊張してるのか？」

「へ、あ！何で俺が緊張しないといけないんだよ?!」

焦ってる焦ってる。坂田は、絶対嘘とかつけないタイプだな。

「いつも学校では、宮野と平気で喋ってるのに、何で今は、喋らないんだよ。」

坂田は、遊んでる最中、宮野とあまり喋ってない。（俺が、二人分喋ってるよ）

「いや、何ていうか、な、その…」

「言い訳はいいよ！カラオケでは、喋れよ。」

俺達は、ゲーセン、ファミレスに行き、最後にカラオケに行こ

うと今カラオケボックスに向かっている途中だ。

「いいな。カラオケでいっぱい喋っておけよ。んで、帰り道は、お前ら二人にしてやるからよ。」

「ええ!?!」

分かりやすい驚き方だ…

カラオケボックスが、見えてきた。

カラオケが、終わり、四人で帰り道を歩いている。

「今日は、楽しかったねえ。」

宮野が、みんなに言うように口を開いた。

目の前に分かれ道。

「じゃ、カナこっちだから…」

石川カナが分かれ道の手前で言った。

「あ、俺も。」

石川カナに付いて行くように俺も言った。

「うまくやれよ。」

俺は、坂田に耳打ちをした。

そして、俺達は、それぞれ別れの言葉を言って二手に分かれた。

しばらくして。

「天野君、家この方向なんだあ。」

「いや、あっちの方向だけど、あの二人を二人きりにしたくてね…」

石川カナは、しばらく考えて。

「ああ、そういう事!」

納得した顔で言った。

「ていうか、今日の四人、なんか面白いメンバーだったね。」

「ん？何で？」

「みんな今年の転入生。あと木下もだけど。なんかカナ達のクラス転校生、多過ぎー。」

「みんな転校生だったの！？」

「うん。カナが転入してきて、次に桜と坂田君が、転校してきて、んで木下が来て、次に、天野君が来たんだよ。まあ、元々他のクラスより人数少なかったからうちのクラスに転校生が、多いんらしいけどさ…」

ふーん、木下も転校生かあ…

さ、もう恋のキューピットも終わった事だし、そろそろ仕事に集中しないと俺の命がやばいぜ…

そして、石川カナのマンションが見えてきた。

「ねえ、天野君。」

「ん、何？」

「この前、“また今度”って言ったよね。」

あ、そういえば。

しかも、この前監視課だと思った奴は、悪魔だったんだから大丈夫なんだけど、さっき仕事に集中するって決めたばかりだし、天使としてほんとは、やっちゃいけない事だし、俺には、天界に彼女がいるし…

「家、寄ってく？」

石川カナが、聞いてきた。

長い夜になりそうだぜ…

★五日目

五日目

今は、朝の八時半。今から準備して学校に着くのはギリギリだ。石川カナは、五時までずっと起きてた。どんな体力だよ、天使の俺が体力負けするところだよ。んで、石川カナが寝てそれからアパートに帰ってきて結局寝たのは六時頃だから睡眠時間は、二時間ぐらいか…

眠い！！

けど、今日頑張らないと俺の命が危ない…

頑張って、学校行かなくちゃ…

十一時、学校到着。

あれから結局寝坊して遅刻。睡魔には勝てない…

「まーた遅刻か、天野。」
と坂田。

「家が遠いんだよ！」
学校まで徒歩十五分。

「ていうか、坂田。昨日、どうなった？」

「…それなんだが、昼飯の時、屋上来てくれないか？」

「おう、いいぜ。」
いい報告待ってます。

昼食時

俺は、約束通り屋上へ来た。屋上では、数個のグループが輪を作って昼飯を食べてる。

その中に一人フェンスからグラウンドを見てる異常に肌が黒い奴が、立っていた。

「坂田ー。」

すぐ後ろに来て声を掛ける。坂田は、無言だ。

「なーに黙り込んでるんだよ。“黒い”ぞ。」

「ソレ言うんだったら“暗い”だろ」

「で？」

「“で？”って？」

「何か話あったんじゃないのか？」

「あ、うん…」

て、また黙り込んでるし…

「何なんだよ！さっきから黙り込んで！何か話があるんだろ！？」

「昨日、桜に告白した…」

え、えー！！！！？

「で、で？」

「OK…って。」

「良かったじゃん！！おめでとう！」

俺、良い事したなあ…。天使の鏡だな、俺。

「良かったのかな…？」

て、何故テンションが低い。

「何だよ、それ。いいに決まってんじゃない。好きな女の子に告ってOKされる。何が悪いんだよ！」

「いや、そういう事じゃなくてさ…」

「ん？じゃ、どういうこと？」

「…んー、何て言うかなー。俺と桜は、そのー、本当は、付き合っちゃいけないんだよ。うん、何て言うか、例えるなら“ロミオとジュリエット”なんだよ。」

なんだそりゃ？

「親同士が仲悪いのか？」

「いや、違うんだけど、まあ、似たようなモノかな…」

………

「なあ、坂田。“ロミオとジュリエット”って、最後どうなるかわかるか？」

「愛し合ひすぎて二人共、死ぬはめになる…」「うん。だから、お前も死んじゃえばいいんじゃない？」

「え？」

「さすがにそれは、無理か…。なら逃げちゃえ。しがらみの無いところまで二人で逃げちゃえば？そしたら、二人で愛し合えるじゃん。」

長い沈黙。

「うん、そうだな。」

坂田の短い答え。だけどすっきりとした答え。

「ありがとう、天野。お前のお陰でなんか気持ちしが固まったよ。」
「おう、良いってことよ。俺は、天使だからな。」

昼食時間終了の鐘がなった。

さあ、一件落着いたところで仕事を頑張らなくちゃな。
今日は、木下も学校に来てるしな、あの手この手でじっくり調べてやるぜ。

まあ、どうやって木下が、悪魔かを調べるかというところ……

これしかない。題して“十字架投げ反応見作戦”！！

説明しよう。作戦名通りである。

この前、宮野を調べる時に使った十字架のネックレスをこの天界一の強肩で木下に向かって全力投球。

んで、木下の反応を見て悪魔かどうかを確かめるっていう作戦。

うーん。我ながら上出来な作戦だ。

よし、作戦も決まったし、善は急げ。くられ、
“170kmク
ロス”！！

すぽっ

十字架のネックレスがすっぽ抜けた。

チャリン

空しく俺の後ろ側の地面に落ちる。

「天野！、何か飛んで来たぞお。」

後ろから、坂田の声がする。

「ごめーん。」

坂田が、十字架のネックレスを拾おうとする。が、

「うっ」

ネックレスを拾おうとする坂田の手が静止する。坂田が、その体勢でこっちを見、目が合う。

「…ご、ごめん、天野。ちょ、ちょっとトイレ。」

坂田は、走って教室を出ていった。

今の反応…

坂田、まさかお前が…

その日、坂田は学校を早退し、顔も見せずに家に帰った。

★六日目

六日目

期限まであと二日。今日は、学校が休み。

昨日はあの後、結局木下を調べなかった。調べる気にならなかった。

悪魔が誰か、多分分かったから。



ケータイの着信音になる。カニ先輩だ。

「…もしもし。」

『…どうした？そんな元氣のない声して。なんかあったのか？』

「別に…、何もないですよ。朝だから…です。で、何の用っすか？」

『お前、仕事は順調なのか？あと今日を合わせて二日しかないぞ。』

「…」

『難しいのか？』

「いや、もう誰が悪魔なのかとかは、わかってはいます。」

『そうか…』

「…」

『タロエル。』

「は、はい。何すか？」

『いざとなったら“エレメント”を使ってもいいぞ。』

“エレメント”っすか！？許可は下りたんすか？」

『いや、許可は下りていない…。だが、死ぬよりはましだろ。』
「カニ先輩も始末書だけで済みますしね。」
『だな。』

「…」

『タロエル。』

「はい、今度は何ですか？」

『任務失敗したら、まず俺に連絡しろ。一か月ぐらいは、延命させてやる。』

「カニ先輩と二人きりの逃亡生活かよ。何か気持ち悪いっすね。」

『何だ?!? 人が心配して言ってやってるのに。』

「心配は、いりませんよ。俺は、失敗しませんから…」

カニ先輩には、借りがいっぱいあるから失敗する訳にはいかない。
い。

『そうだな、心配して損したよ。じゃ、切るぞ。』

「はい。サヨナラっす。」

プッ プー プー プー

とは言ったモノのどうすりゃ良いのかねえ…

ピンポーン

誰だ? このアパートは、誰にも教えてないけど…

ガチャ

「オ、オッス。」

そこには、日本人には見えない肌の黒い奴がいた。

「さ、坂田！！良くこの家分かったな。」

「ん、まあな。」

「上がれよ。」

坂田を部屋の中に案内した。

坂田は、今に腰を下ろし、俺はベットに座った。

「あのな、天野。お願いがあるんだ。」

坂田が、切り出した。

「何？」

「俺を殺して欲しい。」

：

「何で？」

「もう知ってるんだろ。俺は、悪魔なんだよ。」

「やっぱり：」

「天野、お前は、天界から俺を殺しにきた天使なんだろ？」

「ああ：」

「じゃあ、お前にとっても俺は、死んだ方がいいじゃないか。」

：

「坂田あ、俺にはわかんないんだよ。俺たち対抗課の天使は、すごい悪い事をした悪魔を殺すのが仕事だ。だけどお前は：」

「悪い事はしたよ。しかも天界にも魔界にも“第一級大罪”とされてるとーっても悪い事をな。」

「第一級大罪！？一体何したんだよ？」

•
•
•

「天野、その前になんか飲み物もらっているか？」

「あ、うん。そこに座ってて。」

俺は、お茶をコップに入れ天野に渡した。

グビ
グビ
…

坂田は、一息ついた。

「じゃあ、話そう。知っての通り、俺は悪魔で、桜は天使だ。」

うん。坂田が悪魔で、桜が天使……

え
えっ！！！！！？？

「桜って天使なのお??!!!!」

「え、お前知らなかったの!？」

「じゃあ、もしかして第一級大罪って…」

“悪魔と天使の恋愛”

それは、世界に混乱と混沌をよぶ。よって、それは、天界でも魔界でも禁じられている。一番最近の“悪魔と天使の恋愛”は、天界と魔界の大戦争を起こした。それほどの大災害を及ぼす大罪だ。

「俺は、てつきり昨日で俺に気付いて、前に桜とお前で二人でいた時には、もう…」

なーんにも気付かなかった。俺って鈍感。

「ま、そうゆう事だ。昨日、お前と話した後…。真剣に桜と二人でどこまでも逃げようって考えたんだ…」

逃げられたら、俺の命が……

「だけど、出来なかった…。俺にも魔界に家族がいるし、桜にも…。混乱と混沌を起こしたら…。な。だから、俺一人で死ぬコトにした。」

「宮野には…」

「この事は、言っていない。俺一人が死んだら良い問題なんだ。桜には生きてもらいたい。そうゆう事。まあ、厄介な事に悪魔は、自分じゃ死ねないからな。だから俺を殺してくれるな？」

：

「あ、ああ。わかったよ。」

「ありがとう。だけど、殺すのは明日にして欲しい。」
え、

「何で？」

「俺を倒しに天使のお前が来たように、桜にも悪魔の暗殺者が地上に来ている。そいつらを倒して、桜を助けたい。」

「ま、まじで！？そんな奴等いたの？」

「しかも、桜が奴等のターゲットっていう事を今まで隠してたんだけど、昨日気付かれた。奴等は、二人組で一人は、長身で炎を吐く。そいつは、何故か知らないけど消えた。」

あ、俺が倒した奴。今考えれば“お前を見てた訳じゃない”って、ほんとのことで、俺じゃなく桜をみてたのか…
ん？じゃあ、一日目は…？

「そして、あと一人は…、ていいか別にお前には関係ないし。」

「手伝おうか？」

「いや、いい。これは、俺がやらないと…」

「…そうか。」

「最後に言わせてくれ。」

「何？」

「ありがとう。俺と桜は、お互いに惹かれあって地上に下りたのはいいが、大罪のせいで一步踏み出せなかった。だけど、一昨日のお前のお陰で愛を確かめられた。まあ、明日には俺はいなくなるけど、

それだけで俺は幸せだった。」

「ん、そうか。」

坂田は、立上がりドアの方に向かった。

「じゃあ、明日な。」

ガチャ

ドン！

坂田の言葉…

なんか悲しい気持ちになった。

夜。

窓がカタカタ揺れる。きっと外は嫌な風が吹いている。

嫌な予感。

俺のこんな時の嫌な予感は、よく当たるんだよなあ。

♪♪♪

ケータイから音が鳴る。

カニ先輩からのメールだ。

“ターゲットの死亡を確認した。任務終了だ。もういつでも帰って来ていいぞ。PSお土産よろしく。”

ターゲットの死亡を確認した？
なんで？

坂田は、俺が明日殺すんだぞ。

俺はまだ坂田を殺してないぞ。
なんで死んでるんだよ!?

ココロの叫びは空しく体の中に響く。

わかってる。坂田は、殺されたんだ。下級悪魔の坂田が暗殺に
来た悪魔を倒せるわけがない。そんな事わかった。

だけど、俺は坂田を止めなかった。止めなかった。

俺は、気付いたら外に出ていた。やはり、外は風が強く肌寒い。
俺は、木下を追跡した時に辿り着いたあの路地裏にいた。

そこには、そこにあるには不自然なとても小規模の灰の砂場が
できていた。

悪魔は、死ぬと灰になる。その証拠に今まで倒してきた悪魔も
灰になったし、この前倒した長身悪魔も灰になった。

その小さな灰の砂場で灰を両手ですくい上げる。灰の中にピン
ク色の毛が、何本もあった。

自分の中で何かが切れたような気がした。

★らすと

七日目。

任務期間最終日。って、言っても任務はもう終了しているが：

♪♪♪

カチャ

「はい、もしもし。」

『あ、タロエル。カニエルだか、お前帰って来ないのか？お前、前
帰りがついていたからてつきり昨日のうちに帰って来ると思ったの
に…』

「任務期間は、今日までだから、ゆっくり休養にでもしようかと…」
『つまり、サボリか…。ま、今回は、重大な仕事だったからいいと
しよう。ただし、明日からちゃんと仕事しろよ！』

「はい。」

プッ

電話を強制的に切った。

さてと…

俺は、昨日の灰の砂場があった路地裏に来ている。灰は、昨日

の強い夜風によって全部飛んでいった。

その路地裏に

「あれ、天野君？」

女っぽい男が来た。

「おー、木下。どうした？こんな所で…」
パパアーン

俺は、愛用の片手銃を打っ放した。

「はっ、いきなりだね。」

木下は、さっきの場所から半歩ぐらい動いて躲した。

「まあね。」

「ふふっ。」

木下は、悪魔の羽を出して空へ飛んだ。

「あーあ、始末書書かなくちゃな。」

俺も翼を出し飛んだ。

パパアーン

さっきから、計四発撃ってるけど全然当たらない。速すぎる。

この前戦った長身の悪魔も速かったが、木下は、そのの倍速い。

木下が、高速で飛んでくる。俺は、それに対応できない。木下の爪が頬にかすりそこから出血した。すごい切れ味…

「なあ、木下。何で坂田を殺した？」

「仕事の邪魔したからよ。」

相変わらずの女口調。気持ち悪いんだよ。

「お前のその速さがあつたら桜だけを殺すのも可能だろ。なのに何で…？坂田は、お前らと同じ悪魔だろ！！？」

「やあねえ、あんな下級悪魔と一緒にしないでちょうだい。あんなのカスも同然よ。」

ふーん。

「そうかいそうかい。お前の気持ちはよくわかった！もうだめだ、怒りがおさまらねえ。お前は、ぜってえ倒してやる！！！」

「その台詞。私のスピードについていってからにしないさい。」

二個目の傷ができる。こいつ、確実に上級悪魔だ。
パァーン

クソッ、全然当たらないし。

三個目の切り傷が付く。

「はあ、もう退屈だわ。あなたにはガッカリ。セベーンを倒したからどんな強い奴かと思ったら、カスじゃない。」

セベーン？ああ、あの長身悪魔か：

「わるいけど天野君。もう終わらすわよ。」

木下が、また向かってくる。

ずばっ

グシャ

木下は、俺の銃を持ってる右手を切断しそのまま切断した手で俺の体を突き刺す。

いってー。腹に穴が開いたぞ。この野郎。銃もどっかいったし…
だけど、この時を待っていた。

「グ…、これで俺の攻撃が当たるぜ…」

俺は、残った左手を固く握り締める。その拳の指の全ての間には、“特注”の“弾”が挟まれている。

「死ね、おかま野郎。」

残った最後の力で思いきり顔をぶん殴る。

ガンッ！！！！

バァァン！！

拳が爆発する

「うぎゃああああ！」

うっせえよおかま。木下の顔は、ゾンビみたいな顔になっている。俺の左手も…

木下は、刺さっていた手を抜き遠ざかっていく。

「逃げる気か…」

逃がさねえよ。俺は、天界では“追跡蛇”の異名でおそられる程しつこいんだ。

「エレメント発動…」

ボロボロになった左手で天を仰ぐように上にあげる。左手の上に野球ボールぐらいの緑色の半透明な球体が現れる。

「喰らえ、“170kmエレメントボール”！！」
逃げる木下に向かって振りかぶって投げる。

スパッ

スピードが、ダメージのせいで落ちている木下は、完全に交わす事は出来なかった。

だが、かするだけで済んだ。

俺は、ダメージを受けすぎてそこで力尽き、意識がとんだ。

「おほほっ、どうにか逃げ切れるわ。じゃあね、天野君。次会ったら殺してあげるわ。」

そう、かするだけで済んだ。と木下は、思っている。

俺のエレメントは、かするだけで十分だ。

「あれ？目まいがしてきたわ。」

俺のエレメントは、天界唯一の属性“毒”。かすっただけも俺の勝ちだ。

うすれゆく意識の中で灰になっていく木下が見えた。

そして、俺も飛ぶ力がなく、落ちていく。

★えびろーぐ

あれから二日後：

「おはようございますカニ先輩！」

ここは、天園の悪魔対抗課アジア支部の部屋。

「タロエル。もう退院したのか。」

「はい、お陰様で。天界の医療は進んでいますねえ。つい二日前までは、生死をさまよってたのに、俺。もうこんなに善くなって。」

「まだ良くなったようには見えないが…」

俺は、いま右手はギブス、左手と腹部に包帯を巻いている状態だ。

「ま、いろいろ大変だったすよ。右手は、義手決定だし。」

「ああ、お前が入院してる時、俺も大変だったよ。お前が任務に係もないのに羽を使ったりエレメントを使ったお陰で始末書が、山の様にだ。」

え？そんなに？

「タロエル。今日から後始末大変だと思うけど頑張れよ。」

「そんなく殺生なく。カニ先輩手伝って下さいよ。」

「アホ。俺もお前のせいで仕事が増えたんだ。それぐらい自分でやれ！」

コンコン

ガチャ

「お兄ちゃん、弁当持って来たよ」

知らない女が入って来た。はて？どこかで見たような…

「おう、カーニャ。着てくれたのか。ありがとう。」

カニ先輩が言った。カニ先輩の妹かよ。似てねー。

「あ、タロエル、初めてだったな。そっちは監視課に勤めてる俺の妹カーニャだ。」

どっかで見た事あるような気がするんだよな。最近…

「あーっ!!?」

い、い、石川カナだ!!

「こんにちは、タロエル君。」「ちなみに重傷のお前を天界まで運んだのもカーニャだ。」

え、いや、ちょっと待って。

「潜入監視調査の最中だったんです。人間に化けて、天使が×××なことをしないか見張ってたんです。あの時は。」

は？もう意味がわかんない。つまり俺が人間だと思って一夜を過ごした相手は…

監視課！

「ひとつ借りができましたね。タロエル君。」

ああ、大変なこっちゃ…

今、俺の奢りでカニ先輩とカーニヤと俺で飯を食べに来てます。

「で、正直なところ。どうだった？今回の任務。」

今回の任務ねえ

「最悪でしたよ。」

本当に

「ま、一応。天使長から口止めされてるから、周りにはしゃべるなよ！」

…

「ねえ、カニ先輩。」

「何だ？」

「天使の仕事って何なんですかね？」

「…」

「あの二人はただ愛し合っていただけです。なのに何で死ななきゃならなかったんすかね？」

「タロエル…」

「俺、なんか悔しいっす。何もできなかった自分が。」

本当に何もできなかった。

「タロエル、強くなれ。強くなって次あんなことがあったら何かを変えられる天使になれ。お前ならできるさ。」

何かを変えられる天使か…

強くなったら宮野と坂田が、笑って暮らせるような世界が作れるのかな？

なら、強くなりたい。

本当の力が欲しい。

そんな気になる一週間だった。

★えびろーぐ（後書き）

だいぶ勢いだけで書きました。続編を作るつもりなんでそこもよろしく。

★Addぷろろーぐ1

天界。天使が住む世界。

ここは、天園の悪魔対抗課アジア支部。天園とは、天使のほとんどの公務の仕事を行う所。悪魔対抗課とは、悪魔が悪い事したら、魔界に追いつたり、倒しちゃったりする場所。

そんな所で働いている、俺の名前は、タロエル。

「タロエル。」

俺が自分のデスクでケータイのゲームをしてる時にカニ先輩が、俺を呼んだ。

「何すか？カニ先輩。」

「カニ先輩って言うな！カニ先輩部長と呼べ。」

今、俺と喋っているのはカニ先輩。俺より歳は四コ上だがスクールでは、一期上の俺のスクール時代の先輩だ。あ、ちなみに俺の年齢19歳ね。つまりカニ先輩は、23歳。あまりに若い部長だ。

「タロエル、お前にレンタル要請が出てるんだよ。」

「えー！俺につすか！？」

レンタルとは、課間で行われる人材の貸し借りだ。エリート達には、良くある事だが、俺には、初めてだ。

「有り得ないこともあるもんだ。」

今、俺の事、馬鹿にした俺の隣りにいる奴は、オビィ。ただの筋肉質だ。

「うるさいすよ、オビィさん。俺、最近すごい仕事したんですから。」

ま、上から口止めされてるから詳しくは言えないけど…

「お、何かやる気あるじゃないかタロエル。やってくれるのか？」

「まずは内容聞いてからっすよ、カニ先輩。」

「…ん、ああ。そうだな。」

「で、どこの課何すか？」

「あ、うん。あ、期間は、一週間だ。」

一週間。

その期間は、なんか嫌な予感がするからなんかやだ…。って、
「で、ど・こ・の・課何すか？」

「あ、うん、心配はないぞ。お前以外にも、他の課からレンタルされる奴がいるらしいからな…」

へえ、俺の他にもいるんだあ。って、

「そんな事聞いてないっすよ！！どこの課何すか?! カニ先輩！」

…

「あ、何ていうか…、どこの課って言われると言いにくいんだが…」
なんか嫌な予感する…

「まあ、お前がいく所は…特殊部隊。」

へ? 特殊部隊? 特殊部隊って、あの第一二級大罪を毎日って、
いう程関わっているていうアノ“特殊部隊”?

特殊部隊…かあ。って、

「いやいや、有り得ないっすよ! なんで俺みたいな、ふつーな天使が特殊部隊になんて!!!?」

そうだ。有り得ない。特殊部隊の奴等は、小さい頃から、すんげー訓練を受けてるんだぞ。なんで、そんな中に俺が…?

「そうなんだよ…。普通は有り得ない事だ。私も驚いている。」

カニ先輩も驚いている。隣りにいるオビィも驚いている。

「しかもな…」

カニ先輩が、加える様に言う。

「何すか…？」

とくっつても、嫌な予感。

「天使長命令だ。」

うっそくん。

★Addぷろろーぐ2

ここは、俺の自宅。

俺は、今、次の仕事か泊まり込みっていうんで、着替えなどの荷物をまとめている。

明日から、特殊部隊か…

死ぬかな、俺…

ガチャ

「ただいま。」

キサミが、帰ってきた。キサミはキューピット課で働く俺の彼女で、付き合ってから半年。同棲してます。

「え、どうしたの？」

旅行用の大きい鞆に荷物を詰め込んで俺に向かって言った。

「ああ、明日から出張なんだよ。」

「またあ？！一週間前も出張だったじゃない。」

「仕方ないだろ。仕事なんだから…」

そう割り切る事にした俺。

キサミは、荷物を詰め込んで俺を、じくと見ている。

「浮気してるでしょ？」

ブブッ！！！！

「な、何言ってるんだよ。そ、そんな訳ないだろ！」

やましい事は、無いぞ。

「今考えたら、思い当たる節はいっぱいあるんだよなあ。」

「ふ、節い？」

「なあんか最近出張多いし…」

「だから、それは仕方がないって…」

「あと、カーニヤって誰？」

ギクッ！

やましい事…あった。だけど、アレはむしろ俺が、ハメられた
っというか…

「最近ケータイにカーニヤって人から着信多いよね？」

ソレは、弱みを握られてこき使われてるんです。て言いたいけど、その弱みが、言えない…。

「あー、黙り込んでるって事は、なんかやましい事あるんだあー！」

「あ、いやいや、やましい事は、あるけど浮気なんて絶対してない
！」

「今の言葉もう一回言って。」

「…浮気なんて絶対してない。」

「もうちょい前の言葉…」

「やましい事は、あるけど…？」

あ、言っちゃってるね、俺。

俺は、とある家の前にいる。

ピンポン

ガチャ

「お、タロエル。どうした？」

カニ先輩が出てきた。そう、ここはカニ先輩の自宅。その前に旅行用の大きい鞆ひとつ持っている俺。

「今日、泊めてくださいー！」

とりあえず、泣き付く。

「は？どうしたんだ？お前。」

「彼女にありもしない浮気疑惑で追い出されたんですー！」

あんたの妹のせいだな。

「あ、いいぞ。上がれよ。」

ああ、この人はいいい人だ。

「あざあああっす！！！！」

「明日から、出張でよかつな、お前。」

俺は、その夜泣きつくした。

★Add 一日目

レンタル一日目。

俺は今、天園から離れた場所に来ている。どうやら特殊部隊の集まる場所は、人にあまり知られない様に普通の住宅街にあるらしい。

俺は、昨日カニ先輩から渡された地図を頼りに特殊部隊の基地を探してる。

えーと、ここだよな？

そこには、どこから見ても怪しい真っ黒な家があった。別に家の形は普通なんだけど、真っ黒って…

ピンポーン

とりあえずインターホンを押した。

…

誰も出てこない。勝手に入っているのか？

ガチャ

「お邪魔します。」

中に入ってみると、広いけど何にもない一室だった。

ヒュン

ドォーン！

俺の真上から何か落ちて来た。俺は、前方に前転してぎりぎり躲した。

「うあゝ、アブねえ…」

そこを見てみると、長い槍をもったロン毛の男がいた。槍は、地面に刺さっている。

避けなかったら死んでるぞ…

「誰だ！？」

ロン毛は、叫ぶ。

「あの…、悪魔対抗課からレンタルでお手伝いに来ました。タロエルです。」

…

ロン毛は、じーと俺を見てる。

「知らん！」

地面に刺さっている槍を引き抜き突いて来た。

「うわっ！！」

躲す。が、腹にかすり、服が切れる。

「え、ちよっ、待って下さいよ！天使長命令で来たんですよ！」

「俺は知らん。」

再び、ロン毛が槍で突いてくる。俺は、鞆を手放し思い切り後

ろに飛んで逃げる。

「クソ、何で連絡がいてないんだよ！」

俺は、飾りの様に置いてある地球儀を持った。

「先に攻撃したお前が悪いんだからな！」

地球儀を左手で持ち振りかぶって：

「喰らえ！ “170kmワールド”！」

地球儀を思い切りロン毛に投げる。

ロン毛は、横に飛んで避けた。

「甘い！ “スライダー”！！」

投げるモノに回転をかけて投げる事によって曲げる技術。

地球儀は、ロン毛が避けたと同時に、絶好のタイミングで曲がる。

ロン毛の避けた方と逆方向に：

「…」

「…」

痛い空気が流れる。ハズい…。穴があるなら入りたい。

「…ごほん、本気で行くぞ。」

ロン毛は、そう言い低く構えた。

「じゃあ、俺も本気だ。」

見て驚け、右の義手の三つの機能のひとつ。“刃化”。

右手の手首から上を右に回すと右手の手首から上が剣になる。

「一撃必殺！」

ロン毛がそう叫び、地面を蹴り、物凄いスピードで突っ込んでくる。

俺も負けじとロン毛に向かって走る。

「やめろ!!!!」

!!!!?

部屋の奥の方から声がする。

同時に俺の体は止まった。ロン毛も止まる。俺は、自分の意思で止まったわけじゃない。勝手に体が止まったんだ。

声のした方を見ると、そこには、厳格のあるひげを生やしたおじさんがいた。

ひげを生やした男は、こっちに来た。

「初めまして、タロエル君。私は“アブク”。特殊部隊の隊長を勤めてるモノだ。」

ひげの男、アブクは近くで見ると、頬に古い切り傷があるのがわかる。

「ジキルう!!!」

「は、はい。」

アブクが叫び、ロン毛が返事をする。そして、アブクが、ロン毛の所まで歩きロン毛の髪の毛を掴んだ。

「ジキルう。タロエル君はな、我々特殊部隊のお手伝いをしにわざわざ出向いてくれてるんだぞ。なのに攻撃してどうするんだお前は、ああ、わかってんのか?」

お怒りです。

「す、すいません。」

ロン毛もたじたじ…

「すいませんねえ、タロエル君。この馬鹿が迷惑かけて、こいつは

“ジキル”って奴です。特殊部隊のナンバー4の腕は、たつけどちよつとあたまが…”

アブクは、こっちを向き頭を指でチョンチョンと指すジェスチャーをした。

「は、はあ。そうですか…」

そんな言葉しか返せない。

「…仕方ないじゃないか。レンタルが来るなんて、連絡来てないから…」

ジキルが、呟いた。

「じゃあ、タロエル君、ジキル。早速だけど本題に入るぞ。」

本題？

ああ、仕事の事ね。特殊部隊は、極秘任務だから事前には仕事の内容を知らせないようだ（カニ先輩曰く）。だから、場所と時間だけ教えられて他は何一つ教えられてない。多分、ジキルもそうでレンタルが来ることを知らなかったから俺を疑ったんだろう…

「今回は、地上に降りてある調査をしてもらう。」

アブクが、言った。ジキルも俺も黙って聞く。

「タロエル君。君も知ってる通り、先日、第一級大罪の危機があった。」

うん、あった。

「その大罪は、君の活躍により災害になる前に阻止できた。」

あんまり思い出したくない記憶だ。

「そして、実はここ最近、第一級大罪の危機が多発している。つ…！！？」

「その危機は、特殊部隊が受け持っているんだが、危機が多過ぎて、特殊部隊の人間が足りなくなり君に仕事が回ってきた。それが、君にあの任務が回ってきた真意だ。」

特殊部隊って何人いるんだよ…

「…これからが、本題だ。この第一級大罪の危機の多発は、過去に例を見ない。確実に裏で糸を引いてる奴が、存在する。」

アブクの顔がさらに厳格になる。

「そこで、タロエル君にはジキルと組んでその裏で糸を引く者の捜索をして欲しい。」

「…なんで俺が？」

そこが分からん。

「ターゲットは、前の任務で君が降りた地上付近にいると思われる。あそこで大罪の危機が多いからな。そこで、あそこにしばらくいた君なら捜索に何か力になりそうだからね。」

なるほどね。

「やってくれるね。タロエル君。」

「…はい。どーせ断れないだろうし。」

それに、あの事件に黒幕がいたとなるとそいつは、許せない。

坂田…。宮野…。

「そいつが、坂田と宮野を恋をするように仕組んだんすか？」

「ああ、多分そうだろう。黒幕が属性“恋”のエレメントを持っているか、その仲間が持つてるか、どっちかだろうな。」

二人が、本当に恋に落ちた可能性は無いのかよ。

「ま、どっちにしても坂田と宮野を弄んでたんなら、そいつは許せねえ。喜んでこの任務やってやりますよ。」

もうあんな悲劇は、ごめんだ。

ん？ “恋”のエレメント？

犯人を捕まえる↓恋のエレメントを使ってもらう↓キサミと仲直り

お、何かやる気出てきたぞ。

「何にやけてんだよ、気持ち悪い…」

ジキルが言った。

★Add二日目

レンタル二日目。

今は、ジキルと一緒に地上に降りて来ている。

「なあ、ジキル。まだ着かないのかよ。」

「…」

何か喋れよ！

俺達は今、先に地上に降りて来ている仲間と合流する予定で目的地へ向かっている。そこに特殊部隊の一人とあと一人レンタルされた奴がいるらしい。

「ジキルう。俺以外にレンタルされた奴って誰なんだよ？」

「…」

喋れよ！！

なんか俺が一人で喋って寂しがり屋さんみたいじゃねえか！

「ジキルの母ちゃんデーベソ！」

「俺の母はデーベソじゃない！」

そこには、反応するのかよ！マザコン？！

「そんなことより、地図によるとあそこらしい。」

「へえー。」

あのマンションに仲間がいるのかあ…。ん？なんかどっかで見たことあるマンションだぞ。はて？どこでだっけ…？

そんなこと考えてるうちにマンションの部屋のドアの前に辿り着いた。

「ここだな。」

ジキルが言った。また昨日みたいにドアを開けたら攻撃されるんじゃないんだろうな。

「ジキル、お前がドア開けろよ。」

ジキルは、素直に部屋のドアを開けた。

結果から言ったら、俺は攻撃をうけた。

「カ、カ、カーニャ！！！！」

精神攻撃を。

「あれ？下僕一号じゃん。あと一人のレンタルされた奴ってあんただったの。」

そう、このマンションは、前の仕事の時にカーニャと一夜を過ごしたあのマンションだったのだ。

あー、最悪。しかも『下僕一号』って名前ついてるし：

「あんた今、最悪〜と思ったでしょ。」

「べ、別に思ってたねえよ。」

思ってたよ。

ていうか、こいつのせいで俺はキサミから家を追い出されたんだぞ。ぶっ飛ばして。でも、こいつが『あのこと』をバラしたら俺、仕事なくなるし：

「あんた今、ぶっ飛ばして〜と思ったでしょ。」

「お、思ってたねえよ！」

心読めるのか！？

「あのー、そろそろ自己紹介とかしませんか。」

部屋の奥から体付きのいい男が現れた。

「俺は、ジキルだ。」

早っ！今から助け合っていく仲間だろ、ちゃんと自己紹介しろ！

「私は、カーニャ。所属は監視課です。呼びたかったら『石川カナ』って呼んでもいいですよ☆」

その自己紹介は、俺に対する精神攻撃か？

「僕は、ムノ。特殊部隊のナンバー5です。趣味はピアノ。特技は裁縫です。」

その体付きで、その自己紹介は、キモい！

「俺は、タロエル。悪魔対抗課っす。よろしく。」

みんなの自己紹介が終わった。

「早速ですが、これからの皆のやるべき事を話してもいいかな。」
ムノが言った。こいつオビィと同じくらい筋肉質だな…

「これから例のテロリストを捜索するにあたって、常に二人一組で
ペアを組んで行動してもらいます。」

「ちょっと待て、デブ。なんでお前が仕切ってるんだ？」

ジキルが、言った。

「デブじゃなああいし！それにこの面子じゃ僕がリーダーに適任だし。」

「なんだと！俺の方がナンバーが上だろ！」

「だから、デブじゃなああいし！！ナンバーが上でもジキル頭悪いじゃん。だから、アブク隊長から僕が仕切るようになって言われているし。」

「馬鹿だと…」

俺の隣りの人キレてるし。特殊部隊ってそんなに仲良くないのか？
…て、

「ジキル！槍は出すなって！こんな狭い部屋で暴れたら俺にも被害があー！！」

「そうよ。暴れないでよ。私の部屋よ！やるんだったら、外でやってよ。」

「そうそう、外で………て、ちがああう！！取りあえず暴れるな。」

「タロエル君、無駄ですよ。この馬鹿は、何言っても聞きませんよ。」

ジキルが、ムノに向かって突きの構えで何かをためている。

「食らえ、一撃必殺！チェストオオオ！！」

ドゴォン！

ジキルの踏み込みにより部屋の地面は破壊される。物凄いスピードで槍がムノに向かう。

で、冷静に見てる場合じゃない！

右の義手の三つの機能の一つ“銃化”。右腕の手首から上をパカッと外す。狙いを定めて。

「ホールドネットショット！」

手首から、弾が発射される。その弾は、真っ直ぐジキルに向かい、ジキルの1メートル手前で炸裂し、目標を捕獲する網となる。

「よしっ！」

網は見事にジキルを捕らえる。だが、

ブチッ

えええっ！！

網が弱いのか、ジキルの勢いが強いのか、網はすぐに切れた。

「うおおおお！！」

ジキルは、気合いを入れてムノに突っ込む。だが、ムノは余裕のある顔だ。

「“視”のエレメント。」

ムノはそう呟くと、槍をヒラリと躲しジキルを掴まえた。

「残念でした。」

「まだまだあ！」

ジキルは、半歩離れて体勢を立て直す。が、

「人の家、こわすなあああ！！」

カーニャだ。カーニャは、ジキルの綺麗なロン毛をつかんだ。

「うおおお！」

！！？

そのまま振り回した！！

どんな怪力だよ。てか、ジキルの髪の毛も丈夫だな。

ドッゴオオン！

カーニャは、振り回したジキルを壁に叩き付けた。さすがのジキルも気絶してる。強っ！監視課が特殊部隊倒しちゃったよ…。特殊部隊の面子丸潰れだよ。

「あゝ、部屋こんなに壊しちゃって。」

とカーニャ。半分は、お前が壊したと言いたい。

「ふう…」

ほら見ろ。ムノもたじたじだぞ。

変な意味で気まずい雰囲気だよ。

「ムノさんのエレメントって“視”なんすね。」

この雰囲気の中、取りあえず訊く俺。

「あ、はい。便利なエレメントですよ。よく見えるんです。」

んゝ、失礼だけどパツとしないエレメントだなあ…

「タロエル君、左利きでしょ、あと瞳は黒のカラーコンタクトをしてるけど、ホントは…灰色かな。えーと、服に隠し持ってるのは銃だね。」

「えっ?!」

な、なんでわかるの?! ストーカー?! 残念ながら俺には、ソツチの趣味は無いぞ。

「これが、“視”のエレメントです。観察能力が、通常の何倍にもなるんです。」

「へー、便利☆」

とカーニャ。

「ちなみにカーニャさんのサイズは上から…」

ドゴッ

おいおい、かかと落としはどうかと思うぞ、カーニャ。

こうして、この部屋は俺とカーニャと気絶した二人という異様な雰囲気包まれた。

お前、そんなに強いなら特殊部隊に入れよ。

★Add三日目

「呪われた子だ。」

「こっちに來るな忌み子。」

「うわー、化け物が、こっち見てる。」

もうそんな言葉にもなれた。

「お前、悪魔と天使の禁忌の子なんだろう。」

母と父が、早く亡くなり天使には生まれない“瞳”とエレメントの
せいで、そんな噂まで流れてた。

「お前とは母ちゃんが遊ぶなって言われた。」
噂によってまともな少年時代は遅れなかった。

そんな中、

「私に着いて来い。一緒に天界を変えよう。」
俺にも救いの手があったんだ：

そこで夢は覚める。

レンタル三日目。

ここは、天園で一番大規模な会議室。
そこで月一度の天園会議が行われる。もちろん悪魔対抗課アジア支
部長の私、カニエルも出席している。

今日は、天園会議。天園会議では、最近起こっている問題について
天園の偉い方が話し合う。

予算の話。

治安の話。

選挙の話。

教育の話。

色々な事が、長時間により話し合われた。だが、私が一番重要と思
っている話には触れもしない。

そう、大罪の危機について…

天使長は、一刻も急がないといけない事態なのに、余裕の表情で一
番高い天使長の席に座っている。隣りには、この前、天使長の部屋
で見た偉そうな奴。

一体、天使長は何を考えているんだ？

怒りが込み上げてくる…

俺は、今、前回の任務でいた学校に再びいる。カーニャも一緒だ。
ムノ曰く、大罪を企むテロリストは、宮野と坂田と接触が多くなる
学校にいた可能性が高いという事で、俺とカーニャで学校でそれら
しい奴を探せと言う事だ。

ふう、面倒臭え…

前回も怪しい奴探したけど居なかったっの。今回も期間ギリギリの任務になりそうだ…。

この教室、広くなったなあ…

この中には、この前までいた坂田はいない。

宮野もいない。そして、木下も…

処理班によって適当な理由をつけての転校や退学などとなっているが、このクラスメートの急な減少に他のクラスの奴も混乱を隠せない。俺とカーニャも二週間ぐらい居なかったしなあ…

ガラガラ

女眼鏡教師が入ってくる。

「はい。今日は、転校生が来てます。」

怪しい奴発見。

このクラスに来る転校生は、百パーセント天使か悪魔だ。

「アメリカから来た、ジキル君です。」お前かよ!!
ややこしい。

「ジキルです。」

自己紹介、短っ!

「うわー、ロン毛だ!。」

「でも、かっこよくない?。」

「タイプ。」

「外人かあ。」

ここでは、天使はもてるなあ。

「じゃあ、ジキル君は天野君の隣りに座って。」

ええ！俺の隣りかよ！ヤダなあ…。カーニヤもこっち見てくすくす笑ってるし。この魔性女があー！！

「はじめまして、僕、天野太郎。よろしく。」

初対面のフリして握手を求める。

「何してんだ。気持ち悪い。」

台無し！！！！空気読め！

「そんなことより大体の見当はついたのか？」

「しー！」

せめて、小さな声で喋れよ。この中にテロリストが居るかもしれないんだから。

「そんな顔しても何が言いたいのかわからん。声に出せ。」

あー！もうコイツ嫌だ！！

放課後。

俺とカーニヤとジキルで任務中の拠点となっているカーニヤのアパートへ向かう。

今日は、本当に疲れた。俺の隣りにいる馬鹿のせいだ。

「で、怪しい奴はいたのか？」

馬鹿が喋る。もう馬鹿の言葉はシカトしたい…。ていうか、コイツ何しに来たんだよ。あー、邪魔か。きつと搜索の邪魔しに来たんだなコイツ。

「何を惚けている。いたのか？いなかったのか？」

もう俺に話しかけないでくれよ。自由にしてくれ。カーニヤに訊けよ。あ、さてはコイツ、昨日カーニヤにぶっ飛ばされて苦手意識持

ってるな。一応答えておくか…

「俺は、怪しい奴発見出来なかった。」

お前以外の怪しい奴はな。

「ふう、使えない奴だ。」

「なんだと！ていうか、お前はムノさんとペア組んでの行動じゃなかったのかよ？」

「あいつは、今日、アパートの修理をしている。」

……

「あ、カーニャはどうだった？」

訊いてみる。

「ここでは、カナって呼んで☆」

ソレ、俺のトラウマ。

「カナも見つけきれなかった。皆ふつーな顔してるんだもん。」
「そうだよなあ…」

「今日は手掛かりなしか…」

「そうでもないぞ。」

ジキルが言った。

っ！？

「…そうだな。」 「え、なにになに？」

カーニャは、まだわかっていない様だ。

俺達をずっと着けている黒い影がいる事を。

俺等は、そのまま無言で路地裏に入る。

…偶然にも木下と戦った路地裏だ。

俺達が、路地裏に入ったあとつけていた黒い影、ウチの学校の制服を着けた二人組も入ってきた。

パアアアン

入ってきたところを俺が愛用の銃で攻撃する。二人組は、ヒラリと躲す。

その避けている間に、ジキルが高速で入口に回り込み、逃げ口をふさぐ。

さすが特殊部隊だな。前の任務で戦った上級悪魔より速い。カーニヤには負けたけど…

「あんた達、誰？」

カーニヤが、二人組に訊く。その二人組は、学校では見慣れない奴だった。

「俺等が訊きたいっつーの。あんたら誰なんよ？」

二人組の一人、金髪でチャラチャラした男が喋った。

「質問を質問で返すのは感心しないな。」

ジキルがそう言い槍を具現化した。

あの槍、エレメントのかな？二人組の一人、丸刈りの男は黙り込んでいる。金髪の男は、状況を確認し観念したように溜め息をついて喋った。

「わかった、わかった。話すよ。だからその槍しまってください。怖くて話せないっつーの。」

ジキルは、金髪を睨んだ後、槍を消した。

「君も銃、しまってください。」

俺は、銃を鞘に入れた。

「で、あんた達、何なのよ？」

カーニヤが再び訊く。

「…ふう、俺達は正義の革命軍団“ルシフ”の下っ端だっちゃ。」
金髪の言葉、ウザいな。

「上に命令されて、君達を尾行してただけ。だから君達の詳細とか知らないんだ。」

「“ルシフ”？」

カーニヤが零す。

「そ、“ルシフ”。この腐った世界を変えようとしている組織なわけよ。わかった？」

「お前達の上というのは誰なんだ？」

ジキルが訊いた。

「知らな〜い。指令も間接的に来るし〜。」

間接的に？誰かを通してって事か？

「誰を通してるんだ？」

今度は、俺が訊いた。

「それ教えたら俺が殺されるっしょ。」

「言わなくても同じだ。」

ジキルが言う。それを聞いて金髪は笑う。

「あはっ！お前等、めっちゃくちや悪の軍団じゃん。そんな奴等には何も教えられませんよ〜。」

バサッ

金髪は、翼を出した。それは、紛れもなく天使の羽。だが、

「：羽が黒い。」

「墮天使か…」

ジキルがそう呟くのが聞こえた。

「何してるの二人共！逃げるわよ！」

カーニヤの言葉で羽に見とれていた俺達は我にかえった。

「逃がすかぁ！“銃化”。」

俺は右腕を“銃化”させる。

「逃がさん。」

ジキルは、再び槍を具現化する。

「遅いよん。“迅”のエレメント。」

シュン

金髪は、物凄いスピードで飛んで逃げた。

「待てー!!」

「追うな!!」

ジキルの制止の声で俺は止まる。

「聴取は、一人いれば十分だ。」

そう言いジキルは、具現化した槍を丸刈りの男に向けて構えている。
丸刈りの男は、相変わらず無言だ。

「すぐに喋りたくしてやるさ…、行くぞ!!」

ジキルの槍の突撃。

丸刈りは、その攻撃に反応すらしてない様に見える。

グシャ

ジキルの槍は、丸刈りの腹に刺さる。だが違和感。

「な、何!!」

ジキルが、声を発する。

ドン!

丸刈りは、槍が刺さったままジキルを殴った。ジキルは、吹き飛ぶ。

丸刈りは、槍が刺さっても無言のままだ。

コイツ、何者だ!?

「エアシュート!!」

俺は、銃化した左腕から空気砲を丸刈りに向かって撃ち込む。

ドォオン!

空気の弾は、丸刈りに当たった。だが、丸刈りに反応が無い。丸刈りは、こっちを向き走ってきた。

「くそ、“刃化”。」

俺は、外していた右手首をはめて右方向に回して義手の機能“刃化”をする。

「うおおおお！！」

向かってきた丸刈りに向けて振り上げる。丸刈りの左肩を切った。だが、丸刈りはソレを気にせず俺を蹴り飛ばした。

「ぐう！」

俺は、地面に転がる。すぐに立上がり丸刈りを見る。その時には、カーニヤもすでに攻撃されていた。コイツ強い。

「本気出すぞ。この野郎。」

天界唯一のエLEMENT食らわしてやるぜ。

「待て！」

今まで倒れていたジキルが言った。

「コイツは、俺がやる。」

「無理すんな。槍も無いだろ。」

そう、槍は丸刈りに刺さったままだ。

「槍がなんだって？」

ジキルは、また槍を具現した。

「槍は、一本だけじゃねえぞ。」

そう言いジキルは、丸刈りに向かっていった。

「特殊部隊のナンバー4の力見せてやるよ。」

ジキルは、また丸刈りに槍を刺す。丸刈りは、二本目の槍が刺さっても相変わらず無反応のまま拳を振り上げる。が、

「十本槍！」

ジキルは、そう叫ぶと丸刈りの拳が届く前に三本目の槍を具現し振

り上げた腕を刺す。そして、四本目の槍を槍を具現しまた刺す、そしてまた具現し刺す。それを十回繰り返す。合計十一本の槍が、丸刈りに刺さる。丸刈りは相変わらず無言だが、槍が見事に四肢に刺さり物理的に身動きができない状態だ。むしろ生きてる事が不思議だ。

本当になんだコイツ：

「くそ、やられた！人形だコイツ。」

ジキルが嘆いた。人形？

「どうりで反応が無いわけね。」

今まで丸刈りの攻撃で倒れていたカーニヤが立上がり続いて言った。

「あの金髪が、コイツを置いて平気で逃げる訳だ。」

ジキルがそう言う。その間に十一本の槍が刺さってる丸刈りの様子を見てみる。槍が刺さって身動きが取れない状況じゃなかったら、まだ動きそうだ。

「こんなリアルな人形ってあるのか？」

二人に聞いてみた。

何故かカーニヤは俯いて黙り込んだ。ジキルも渋々口を開く。

「そいつ、元は人間だ。テロリスト軍団には“操”のエレメントを使う奴が確認されている。多分、そいつの仕業だろうな。」

っ！？

「生きてる人間を操っているのかよ！？」

「ああ。」

そんな…。

「コイツ、どうにか助からないのか？」

「無理だ。今から“操”のエレメントが解けても槍のダメージによって即死だ。こんな時は…」

バサアア！

「これ以上、苦しまずに殺すのが優しさってもんだ。」

ジキルは、丸刈りを槍で真っ二つに切断した。ジキルの具現化した槍は、全て消えた。

「お、お前！」

「なんだ。綺麗事でも言うのか？」

「なんだと！」

「これだから、特殊部隊以外の奴と一緒に仕事するのは、嫌なんだよ。」

……

カーニヤは、にらみ合ってる俺等に

「もう帰ろう」

と言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4083a/>

一週間天使。

2010年10月10日03時21分発行